

7 / 3 『隔ての壁をこわす方』(エペソ 2 : 11 ~ 17)

長谷川 望 牧師

*エペソ人を初めとして異邦人は最初、神から契約の外に置かれていた。望みもない、真の神も知らない、いわゆる神々の奴隷であった。「しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。」

(エペソ 2 : 13) キリストの十字架の贖いを信じる者は、どんな民族でも同じ救いにあずかることができ、罪の赦しと永遠のいのちの約束を得る。「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。」(2 : 14 ~ 15) エルサレムの神殿にはここから先は異邦人が絶対に入れない壁があった。ユダヤ人は異邦人に対して契約の民としての優越感と偏見を持ち、異邦人もまたユダヤ人に対して敵意を持っていた。

*イエス・キリストはご自分の体を張って、異邦人の中に入って食事を共にしたり、百人隊長やカナンの子どもを癒された。また、ユダヤ人には、ただ律法を守ろうとするだけの、神の御心に背いた生活に対して警告を与えられた。「このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました」(2 : 15 ~ 16) まさに両者の間に平和を造るために自ら働かれたのである。今では、キリストにおいてユダヤ人も異邦人もない。すべての人がキリストを知り、生まれ変わって新しい人になり、十字架のもとに集まればすべての隔ての壁がなくなり、敵意が消えるはずである。

*昨年パリの劇場で起きたテロで奥様を殺害されたレイリスさんという男性のメッセージが話題になっている。「私は犯人を憎まない」という。憎悪に怒りで応じることは、テロリストの思うツボであるし、憎しみの感情は自分自身をも傷つけ続けるものである。生後 17 か月の息子と共に生き続けること、そうすれば再び自由に愛し合える楽園で会うことができる。そこは犯人たちが入ることができない場所だ、と。

*私たちの自分中心の考えは、罪からきている。その罪は私たちをお互いから隔て、敵意を起こさせる。キリストが来られたのは、一人一人を神と和解させるためにであった。私たちのこの世界は今数えきれない対立、紛争を経験している。わが国も、ともすれば戦争という最悪の状況に巻き込まれるかもしれないという現実と直面している。「キリストこそ私たちの平和であり」とあるように、キリストの平和を知っている私たちが平和の使者となって働くことが求められているのではないか。